



博物館をめぐる動向

岐阜かかみがはら航空宇宙博物館 副館長 長浦 淳

当館建設の契機は、昭和61年の各務原市総合計画における建設構想に遡ります。発端は、市を舞台とする飛行試験で全国的注目を集めていた科学技術庁航空宇宙技術研究所のSTOL実験機「飛鳥」の存在、市に目玉施設を創りたいという当時の市長の思いでした。市始まって以来の大事業であり、様々な方面へ協力要請も試みられましたが、結果的に市単独で事業は進められます。岐阜基地からの実機搬入の利便性、広大な敷地面積確保などの条件から現在の立地となりました。その後、「航空機産業と飛行実験の街の博物館として、国や民間による航空機開発の成果を示し、日本の航空宇宙技術者・関係者が各務原の空で何にチャレンジし何を遺したかを振り返りつつ未来への夢を育む」、「戦前からの国産機資料、特に各務原ゆかりの機体・日本の航空技術開発に寄与した実験機等を重点的に収集・展示する」という館のコンセプトも定まり、平成8年3月23日に「かかみがはら航空宇宙博物館」としてオープンを迎えます。当初は集客に力点が置かれ、平成8年度は48万人超の入館者を迎えましたが、その後は市政における位置づけの変化、入館者数減少、行財政改革などが影響し、人員・予算の削減が続きます。平成17年度には「かかみがはら航空宇宙科学博物館」と改称され館コンセプトの形骸化が進むなど、開館以来、館をサポートしてきたボランティアをも失望させるに至ります。

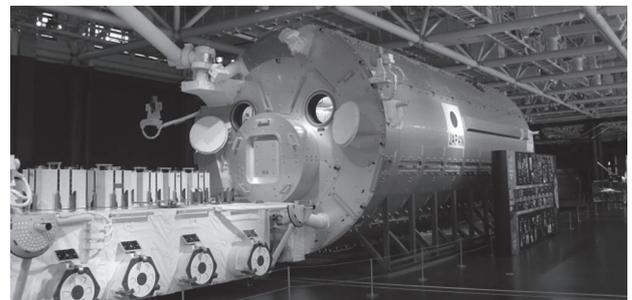
しかしその後、各務原を含む中部地域が日本の航空宇宙産業国際戦略総合特区に位置づけられ、館展示機

の「サブサフィール実験機」、「UF-XS実験飛行艇」が日本航空協会の「重要航空遺産」の認定を受けるなど館への追い風が吹き始め、平成30年3月の再オープンを目指したりリニューアル事業が打ち出されます。本事業は、館が本来めざした姿への回帰のみならず、将来の航空宇宙産業を担う人材輩出をも念頭に置いた産業振興の観点にも立脚し、岐阜県と協働で行われ、本年3月24日、「空・宇宙への挑み〜かかみがはらから日本へ、そして世界へ〜」を基本コンセプトに、当館は「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館」として生まれ変わりました。館内展示面積は従来の1.7倍の約9,400㎡、宇宙エリアも大幅増強され、先人の空・宇宙（そら）への憧れ、挑戦の物語を伝え、子どもたちにチャレンジスピリットと感動を与える「航空技術の歴史が俯瞰できる博物館」、「人類の宇宙への挑戦史・宇宙開発技術の変遷を俯瞰できる博物館」を目指す、国内最大級の航空と宇宙の専門博物館となりました（実機34機、実物大模型9機の計43機を展示）。

来館者の殆どが市外・県外からという館ですが、航空宇宙の世界に関わって来られたOB・現役の市民有志を中心とするボランティアの方々とも協働しつつ、オンラインの貴重な展示機の数々の保存・公開、新設した学芸部門の力量・資質向上、来館者の満足度向上への博物館施設ならではの取り組み、新たな受入資料への対応など、航空宇宙マニアや専門家の方々からも一目置かれるような、岐阜県の各務原市に所在する必然性を伝えられるような館の在り方を希求して行きたいと思っております。



実機の展示



ISS 日本実験棟きぼう実物大

協賛： 公益財団法人
田口福寿会

OKB 大垣共立銀行



十六銀行

平成30年度 岐阜県博物館協会通常総会

期 日：平成30年5月25日（金）
場 所：ハートフルスクエアG 大研修室
参加者：93名（委任状含む）

午前中の理事会に続いて、午後から通常総会が開催されました。若宮多門会長の挨拶、岐阜県県民文化局長矢本哲也様の祝辞、新会員紹介（富加町郷土資料館）に続き、役員改選、平成29年度事業報告及び収入支出決算、平成30年度事業計画及び収支予算といった議案が承認可決されました。



若宮会長の挨拶

議論の中で、ワークショップなどへの参加を促すため、チラシの配布に工夫を凝らすべきとの提言がありました。県内大学、近県の博物館協会、県・市町村の文化財保護協会などへの配布が有効であろうと提案されました。

各専門部会、地域ブロックが取り組んでいる様々な課題も提示されました。例えば、有効な文化財の活用について、観光の視点を取り入れ、観光協会との連携を図ることなどが提言されました。

また、地域ブロックの活動について、充実している地域とそうでない地域の差異についても話題に上がりました。活発な情報交流により課題の共有と解決を図ろうとしたり、複数館が連携して事業を行うことで、地域資源の新たな意義付けを模索している地域ブロックがある一方で、協会の活動から疎遠になり、活動が縮小しつつある地域ブロックもあります。こうした地域については、県などの事業の会場とすることで、岐阜県博物館協会の活動に取り込み、活性化を図るといった案などが提示されました。

（岐阜県博物館 長屋幸二）

平成30年度 もの部会第1回部会と研究会

日 時：平成30年5月10日（木）
11:00～14:30
会 場：岐阜県美術館
出席者：もの部会部会員10名

部会

平成30年度の第1回部会として、まずは、今年度以降の事業についてそれぞれに意見を出しました。「部会員の博物館／美術館の見学、できれば保管庫や資料収蔵状況の見学など」「加盟館の作品カード、台帳を持ち寄って比較検討」「館でそれぞれ困っていることをヘルプできるようなチーム作り」「予算ありきの理想的な保存やレスキューではなく、部会員むけの実践的な活動を」「IPMの実践館の状況が見たい」「名古屋にある伊勢型紙のコレクションの調査、活用について」「どこにどのような資料があるのかを災害時にむけて日頃から把握しておく活動を」「温湿度管理の方法について」「博物館学的な梱包や取扱いについて学びたい」など、今後数年にかけて取り組むべき事業の課題が挙げられました。さしあたって今年度の事業としては、5月25日の総会に行う水損史料の洗浄ワークショップに加えて、「関市が高賀神社の曝涼調査を始めるにあたって、研究会を開催する」「中津川の博物館視察」を具体案としました。また、5月25日の総会・ワークショップについて、打ち合わせを行いました。

研究会

部会の後、岐阜県美術館で開催中の「曝涼展」の視察を行いました。岐阜県美術館では、人体や作品に害を及ぼすエキボンなどを用いた薬剤燻蒸から窒素置換法や水分中立型脱酸素剤を用いた低酸素濃度処理による殺虫・殺卵が可能な処置へと切替えており、IPM (Integrated Pest Management: 総合的有害生物管理) をとり入れた館内環境を整えています。展示会場内に設置展示されている窒素置換による燻蒸テントの前で、担当の岐阜県美術館廣江泰孝岐阜県美術館学芸係長から燻蒸を含めた作品の虫害対策、カビ対策について詳細な説明を受けました。

（岐阜県美術館 正村美里）

平成30年度岐阜県博物館協会 県民文化講演会「わたしが救 う想いの記録」とワークショップ 「体験!水濡れ書類の応急処置」

講 師：松下正和神戸大学地域連携推進室特命准教授
日 時：平成30年5月25日(金)
出席者：加盟館員、一般参加者
講演会：14:30～15:20 45名
W.S.：15:30～16:30 33名
会 場：ハートフルスクエアG 2F大研修室

岐阜県博物館協会の総会に併せて例年行ってきた県民文化講演会を、今年は、もの部会の史料の保存レスキューをテーマに行いました。講師に、岐阜大学の学芸員実習で水濡れ史料の洗浄ワークショップや関市図書館、岐阜市歴史博物館等で襖・屏風の下貼り剥がしのワークショップを行っておられる神戸大学の松下先生をお招きしました。文化財のレスキューと聞くと何か敷居が高い印象ですが、まずは、家族写真や大切なアルバムが水害等で汚損した際に応急処置をどうしたらよいか、といった身近なところから考えようというのが今回のテーマでした。

指定文化財の枠から離れるものについて博物館学芸員はどう考えるのか。日常の暮らしの記録を遺すことは歴史の史料を遺すことでもあります。阪神淡路大震災をきっかけに始まったというこの活動は、写真やアルバムが泥で汚損した際に、人命救助でいう AED のような応急処置を、家庭レベル、個人レベルでできないか、という提案と実践でした。

水損史料救出の基本は、まずは乾かすこと。時間がない場合はフリーズドライが有効とのこと。こうした応急処置を各所で行って欲しい、また、被災前に、地域の史料の所在把握が何より大切であると語られました。

W.S.では、水濡れした大福帳の乾かし方や、泥で汚れた汚損写真の洗浄などを実際に参加者で行いました。バラした大福帳は、水に濡らして測った後その重さが半分になるまでキッチンペーパーで挟んで水気をとり陰干しします。汚損写真は、コンテナに張った水の中に、写真をピンセットでつまんで浸しながら刷毛や筆で丁寧に泥を落としました。その他、和綴りに有効なこよりの作り方を学びました。

(岐阜県美術館 正村美里)

平成30年度もの部会事業 「関市の水害における汚損アル バム写真等の洗浄ボランティア について」の報告

7月に岐阜県下で発生した大雨による水害に際して、岐阜県博物館協会では、加盟館へ被災状況の照会を行ないましたが、特に大きな被災の報告はありませんでした。

一方、関市においては、被災した住民へ手渡した「被災者支援制度ガイドブック」において、汚損写真やアルバムの洗浄作業を行う旨掲載したところ、市民から、泥で汚れたフェルアルバムやポケットアルバム、卒業アルバムなどが寄せられました。

もの部会は、5月に行った汚損史料洗浄ワークショップを実践へと生かすべく、関市文化財保護センター(武芸川町)にて、当センターを中心に、岐阜大学と協同で、洗浄作業のボランティア活動を開始しました。もの部会員、ワークショップ等に参加された加盟館員や他県の学芸員、保存担当者等にメールを一斉送信し、ボランティア参加を促しました。当初は数日で終了するかと思われた作業でしたが、8月半ばには、追加で数十冊のアルバムが寄せられ、作業は9月へと延長されました。神戸大学の松下先生始め、美濃市や富加町の教育委員会文化担当者の方々にもお手伝いいただきました。

現在も継続中の作業については、次の機会にご報告いたします。

(岐阜県美術館 正村美里)



関市文化財保護センターでの作業の様子

第93回会員研修会（広報戦略を考える）

期 日：平成30年1月31日（土）
場 所：岐阜県現代陶芸美術館
参加者：23人
講 師：鈴木裕之（徳川美術館管理部マネージャー）
加藤啓子（徳川美術館学芸部マネージャー）

平成29年度に岐阜県博物館協会の組織が刷新され、以前の研修委員会を受け継ぐひと部会では、会員研修会を一から考え直すことにしました。形式面では外部講師による講義の他に、各館職員の参加型研修を、内容面ではタイムリーで実践的なものや、気軽に参加できて意見交換できるものを、といった方針をたてました。すると、有効な広報のためSNS、画像、デザインの上手な使い方や、新しい試みを学び、成功した事例を知りたい、といった声が出てきました。適任の講師を探した所、ホームページやSNSなどを活発に運用し、コミックマーケット（コミケ）の出展などでも注目を集めている徳川美術館が浮上し、広報を担当されているお二方に講師を依頼しました。

研修会のテーマは「広報戦略を考える—自館の強みを見直す 徳川美術館の事例を中心に—」。加藤氏には、今のデジタルによる広報についての豊富なご経験に基づいて、有効な方法、危機管理の注意点などをお話いただきました。また、徳川美術館は「刀剣女子」ブームの火付け役の一つと言え、コミケへの参加など、美術館・博物館で事例の少ない先端的な試みをされています。この辺りのことについては、鈴木氏が経緯に即して話してくださいました。

聴講した参加者からは、いろいろと質問も出されました。たとえば、インターネットで盛り上げがらせることと「炎上」回避とのバランスについて。人気が出るキャラクターを生む手法をめぐって。若者を新しいターゲットとして開拓すること、従来の博物館ファンとの関係、などについて意見交換がなされました。

今回の研修会では有意義な話が得られましたが、ひと部会では、今日的な広報をめぐる素案に広がりがあるため、今後もこの素案に基づいて研修会の具体的なテーマを考えていくことも話し合っています。

（岐阜県現代陶芸美術館 岡田 潔）

第94回研修会（ミュージアムグッズを考える）

期 日：平成30年3月9日（金）
場 所：みのかも文化の森
参加者：39人
講 師：山下治子（『ミュゼ』編集長）

今回の研修は、日本ミュージアムマネジメント学会（JMMA）との共催で、ミュージアムグッズをテーマに意見交換をし合う参加型を目指しました。参加者には事前に、自館のグッズの持参や制作販売に関するアンケートをお願いしましたが、ほぼ全館がグッズを持参してくださいました。講師は、グッズに関して広い見識を持つ『ミュゼ』編集長の山下治子氏です。参加者は学芸員やショップ店員だけでなく、金銭を扱う事務担当者、空間作りの従事者などもありました。JMMAからは県外館の参加もあり、テーブルには様々なグッズが並びました。



前半は、全国各地の個性豊かなグッズを前にした山下氏の講演でした。独自の発想が生まれた背景、デザインや素材の試行錯誤など制作者の苦労や工夫が、ショップの写真なども交えて紹介されました。グッズを慈しむように笑顔で語る山下氏の言葉は、様々な思いでグッズの制作販売に関わる参加者を大いに刺激し、ミュージアムは人のために在り、楽しく充実した空間であるべきという願いを確認しました。

後半は、参加者が持参した自館のグッズについて順に発表しました。意図、制作秘話、工夫を語る参加者の言葉は熱を帯び、ミュージアムグッズとは、ミュージアムに関わる人々が託したメッセージであるということが浮き彫りとなりました。また、衛生面に配慮が必要な食品の生産管理方法、公立館での制作販売の仕方、在庫管理などの問題をどのようにクリアしたのかという、具体的な質問も飛び交い、館同士の話し合いも自然に生まれました。

ミュージアムグッズは、互いに話し合い、理解し合うことを容易くしてくれる、不思議なツールであるという事実を再認識しました。

（美濃加茂市民ミュージアム 和歌由花）

第150回公開講座 「地域の誇り、旧八百津発電所」

期 日：平成30年8月2日（木）
参加者：12人

第151回公開講座 「知ろうよ！今渡ダム」

期 日：平成30年8月8日（水）
参加者：午前・午後のべ49人

両講座は、美濃加茂市民ミュージアムの企画展「ダムー木曾川・飛騨川ー展」に伴い、同館と岐阜県博物館協会（以下、県博協）中濃ブロック部会が連携して開催しました。

「地域の誇り、旧八百津発電所」は、県博協加盟館である旧八百津発電所資料館（国重要文化財）の施設や展示を観覧し、職員の方に分かり易く解説をしていただきました。

「知ろうよ！今渡ダム」は午前・午後の2回開催し、関西電力さんのご協力・解説のもと、通常は入ることができない今渡ダムや発電所の内部などを見学しました。



両講座とも今年の夏を象徴する暑い日の開催となりましたが、参加者の体調等にも配慮がなされ、熱中症などになる参加者はありませんでした。

公開講座は、会員相互のつながりを強め、また県博協の活動を広く普及するため、昨年度から各地域ブロック部会が主体となって企画・運営がなされるようになりました。各ブロックともまだ手探りの部分もありますが、会員皆さまの積極的なご参加・ご協力を期待しています。

（瑞浪市陶磁資料館 砂田晋司）

館・園紹介 No.164

富加町郷土資料館

〒501-3302 岐阜県加茂郡富加町夕田212
TEL・FAX / 0574-54-1443
URL / <http://www.town.tomika.gifu.jp/shisei/shisetsu/siryokan/index.html>

富加町は奈良正倉院に現存する日本最古の戸籍「大宝二年（702）御野国加毛郡半布里戸籍」（以下、



「半布里戸籍」の故地として知られています。「半布里戸籍」には54戸1,119人分の氏名・年齢・続柄が記されていますが、現在の役場とその周辺でほぼ同時期の竪穴建物跡が100棟以上見つかっています。1,300年以上前に暮らした人々の姿が「記録（戸籍）」と「痕跡（遺跡）」から分かる貴重な事例です。

当館は、こうした歴史・考古資料を適切に保存し、発信することを目的に、平成7年（1995）4月に開館しました。展示室は3室で構成され、第1展示室は旧石器時代～江戸時代までの歴史や発掘調査出土品等を展示しています。第2展示室では、平成21年度～24年度に発掘調査を実施した「夕田茶臼山古墳」（3世紀前半の前方後円墳、岐阜県指定史跡）の調査成果や「半布里戸籍」のレプリカを展示しています。第3展示室では、明治から昭和初期の児童文学に貢献した「木村小舟」に関する展示や、毎年2月～3月には所蔵する土雛を一堂に展示する「つちびな展」を行っています。

このほか、夏休み期間中には小学生とその家族を対象にした「夏休み古代体験ワークショップ」を毎年開催しています。今年は「勾玉づくり」・「古代鏡づくり」・「昔の道具体験」・「染め物体験」・「折り紙づくり（お城・かぶと・手裏剣）」を行い、町内外より多数の参加者がありました。「資料館育ちの子どもたち」を育てる場所として、今後も活動を続けていきます。

（富加町教育委員会 山内正明）



郷土資料館 展示風景



図書紹介

会員のお薦め図書

岐阜大学教育学部准教授 須山 知香

「挑戦する博物館—今、博物館がオモシロイ！」

小川 義和、五月女 賢司 編著
発行 ジダイ社

博物館が博物館として生きるための、知恵と武器



タイトルを見て、「博物館の、なにか面白そうな最新情報のネタが詰まっているのかな?」と思い、手にとって読みはじめると、本書は‘小規模博物館’の現状と直面している問題をおさらいすることから始まります。

これらの問題とは、数ある博物館の中で、小さな所に特有なお話なのかと思いますか? いえ、日本全国を眺めれば、市区町村立博物館において学芸員が一人もいない館が約8割、5人未満の館で98%!なので、これはもう「小規模な博物館は大変ですね」ではなく、つまり博物館では、どこでも・だれもが、とにかく大変な苦勞をしているのだということなのです。

人手、予算、内外からの理解などが無いナイづくしの逆境が、こんなにも各館の創意工夫に満ちた活動を引き出しているのかと驚愕し、あるいは、だからこそ博物館の基本を真摯に見据え、いかに地域に根ざした存在になるのかを追求し続ける姿勢に感服する。そんな様々な話題が、各館で活躍されている方の実体験として詳しくレポートされています。そして各事例・研究を読み解けば、博物館活動の要とは、やはり、それに関わる「人」であることを改めて感じさせられるのです。

博物館を取り巻く諸事情は、これからますます厳しくなる(かも知れない)状況です。とくに、若手学芸員の皆様には、是非とも「よっしゃ、うちではこうしてみよう」という工夫ややる気をつかんだり、「自分の所だけが大変、ではないのだな」という悟りの境地に達したりする(そして、そこから新たな何かを生み出す)ためのエッセンスに溢れたこの本を手を、博物館の‘もの・こと・ひと’を、より活かしてゆく未来へ挑んでいただければと思います。

博物館協会 インフォメーション

第43回東海三県博物館協会研究交流会 兼岐阜県博物館協会会員研修会

日時:平成30年10月19日(金) 13:00~

会場:飛騨高山まちの博物館1階 研修室
(岐阜県高山市上一之町75)

定員:50名

参加費:無料

申込み:各県博物館協会に参加者をとりまとめ、
10月5日までに、岐阜県博物館協会事務局(奥付参照)に連絡をお願いします。

今年度の東海三県研究交流会は、二つのテーマを設定いたします。一つめは、社会的な課題でもあるミュージアムレスキューです。災害時などにおける地域資源の保存と救済活動について現状を把握し、今後、県を越えて取り組む第一歩にしたいと考えています。二つめは、小規模館の活動についてです。各地で行われている小規模館ならではの魅力的な活動事例をもとに、博物館の今後を考えます。

今回の交流会は、個性豊かな博物館が多くあり、着実な実践を続けている岐阜県飛騨地方を会場としました。ぜひご参加ください。

編集後記

7月6日から8日にかけて、西日本の広い範囲が豪雨に見舞われ、岐阜県でも美濃地方の中山間部などで河川の氾濫や浸水害、土砂災害が発生しました。被害にあわれた方々には、心よりお見舞い申し上げます。折しも岐阜県博物館協会「もの部会」では、文化財レスキューをテーマに取り組んでおり、水害被害のレスキュー活動に関わることができました。岐阜県の文化財保護にとっても歴史的な出来事です。今回は「もの部会」より3本の原稿をいただきました。

発行:岐阜県博物館協会

編集:岐阜県博物館協会「こと部会」

事務局:〒501-3941

関市小屋名1989(岐阜県博物館内)

(電話) 0575-28-3111

(FAX) 0575-28-3110